

中院流所伝の『理趣経法』について

——『一法界ソリヤ法』を中心として——

佐藤隆彦

一 はじめに

『理趣経法』は、理趣三昧の導師所用として真言宗では非常によく用いられる修法次第(書)である。今日では真言宗の寺院住職として身につけるべき作法として『理趣経法』を知らない者はいないといつても過言ではない。しかしながら、『理趣経法』の歴史について委しく検討した研究はそれほど多くない。中院流の『理趣経法』についてその成立問題を論じたのは、高見寛恭著『理趣法の意得』くらいである。そこでまず、高見説を紹介し、それを批判的に考証してみたい。そして、中院流において『理趣経法』がどのように修されていくようになったのかについて説明したい。

二 先行研究について

『理趣経法』(一法界ソリヤ法)が中院流に伝来することについて、高見は、

現行の中院流と云えば、大体院家相承に限られている。今その院家相承によって当流所伝の次第を見ると、その伝授目録に

一法界ソリヤ法中――

一帖

五秘密法中――

一帖

の両帖が挙げられている。前帖は内題に「理趣法金」とあり、奥書に「高野山金剛峯寺金堂不断経西壇行法用之」とある。金剛界十種別行立の次第、後帖は内題に「理趣法胎」とあり、奥書に「高野山金剛峯寺金堂不断経東壇行法用之」とある。胎藏界別行立の次第である。これ当流相承の理趣法である。奥書に依ると、金堂不断経西壇行法用とあるが、単にその行要だけに限らず、広く一般の法要儀式にも依用せられている。¹⁾

と述べる。

そして、この二つの次第について、

これ等両帖は、伝授目録に収載せられる以前から、当流で使用せられていた形跡があるが、正式に当流相伝の次第として取り上げられ、伝授目録に載せて相承される様になったのは高野山円通寺密門律師に依つてであるらしい。

と述べる。その根拠として、次の三点をあげる。

一、彼の明和七年所授の『中院流伝授目録』に初めてこれ等が載せられていたが、それ以前の目録には載せられていないこと。
 二、彼と同時代の同山成蓮院真源大徳、大徳は院家相承を貶し、我が所伝を中院本流と称して中院正流と誇る師であるが、この大徳がその著である『理趣三昧古草撮要』の中に「近代、法三の御子の一法界ソリヤ法について理趣法を修する者があるが、これは当流の先規ではない。当流曾て一法界法を伝えることを聞かない」と云っている事。

三、両帖とも上記の奥書の直後に「沙門本初金剛密門」と自署があり、本初金剛密門がこれ等両帖を取り上げて金堂不断経両壇行法所用として一具に調えたことが知られるが、その本初金剛とは上の密門律師と同じ師である。即ち、密門律師がこれら両帖を金堂不断経両壇行法所用として調える際に、我が所伝である中院流院家相承によつて組み立て、組み立てただけでそのまま捨て置かず、自分が一流伝授する時に、その伝授目録に収載して伝授したと思われる節があることである。⁽²⁾

高見は、この三の理由により中院流では密門から『一法界ソリヤ法』を『理趣経法』として用いるようになったとする。この部分の高見の見解について筆者は全く異存が無い。

次に問題となるのは、『一法界ソリヤ法』が密門までどのよう相承してきたかである。

このことについて、高見は

中院流所伝の『理趣経法』について(佐藤)

『高野春秋編年輯録』等によると、流祖明算大徳は再三理趣三昧の導師を勤めたとあり、又流祖以後の代々の祖師達も大抵理趣三昧の導師を勤めているから、流祖以来当流に理趣法或いは理趣経法を伝持していた事は分かるのであるが、流祖始め祖師達所用の次第が今の理趣法であるか如何かは立証する編作記録もないのでハッキリすることが出来ない。院家相承とは宝性院に伝えられた中院流であるが、この宝性院には又安祥寺流をも相伝して居り、その間には印信や聖教類の交流相承が少なからず見受けられる。で、或いは安祥寺流に一法界ソリヤ法の何か次第類が伝えられていて、それが今の院家相承の方へ流入して来たのではなからうかと私案し、安祥寺相承の聖教目録を探って見ると『一法界ソリヤ』一紙がある。その奥書には、「大僧都御房御自筆を以て書写し了んぬ 宗意」とあるが、この一紙、その内容を検するに、真寂親王の『一法界ソリヤ』と一語一句も相違がない。即ち真寂親王の『一法界ソリヤ』なのである。⁽³⁾大僧都御房とは勸修寺流嚴覚僧都のことである。

として、中院流に『一法界ソリヤ法』が相伝したのは安流の影響によるとする。

その上で、高見は

以上考証した結果を総合して、当法が(筆者注『一法界ソリヤ法』中院流に相承せられて来た血脈を左に釣ると、

大日如来—金剛薩埵—龍猛菩薩—龍智菩薩—不空三蔵—惠果和尚—弘法大師—真雅—源仁—益信—神日—真寂……—寛空—寛朝—深覚—信覚—嚴覚—宗意—実嚴—頼真—成嚴—寛海—兼意—寛伊—成慧—光誉—隆雅—興雅—宥快—成雄—快尊—良雄—嚴雅—快旻—宥智—

中院流所伝の『理趣経法』について(佐藤)

朝意—道意—良意—教栄—維宝—妙瑞—密門—龍海—隆鎮—栄巖—
密腆—哲雄となる。⁽⁴⁾

と記し『一法界ソリヤ法』は安流から中院流へと相承したと主張する。

三 中院流 『一法界ソリヤ法』の根本資料

中院流所伝の『理趣経法』『一法界ソリヤ法』について考える場合の根本資料は、高野山大学図書館、真別処寄託本にある。それは、

『一法界ソリヤ法中—』

『五秘密法中—』

である。⁽⁵⁾

前帖は、表紙に密門とあり、奥書には、「高野山金剛峯寺金堂不断経西壇／行法用之／沙門本所金剛密門」とある。

後帖は、表紙に同じく密門とあり、奥書には、「高野山金剛峯寺金堂不断経東壇／行法用之／沙門本所金剛密門」とある。両帖とも高野山金堂の不断経の所用であることがわかる。

なお、これら二帖を包む紙には、

五秘密

一法界

と題を記し「隆鎮」とある。

この二帖は中院流の『理趣経法』を検討する場合の根本資料である。これら両帖は、隆鎮所持本であるので密門自筆本である可能性も十分に考えられる。高見は『理趣法の意得』の中においてこの両帖の次第を全文翻刻しているが、それらの翻刻が何れの写本にもとづくかについては何ら明示していない。したがって、中院流の『一法界ソリヤ法』について考察するとき高野山大学図書館所蔵の写本がもつ価値はきわめて高い。

そこで、この写本にもとづき、『一法界ソリヤ法中—』の内容を簡単に紹介していく。『一法界ソリヤ法中—』の内容は、道場観については、真寂の『ソリヤ法』に同じである。すなわち、

観想せよ虚空の中にバン字あり如意宝珠となる。五色の光を放つ。光の中にバウンタラクキリクアクの字あり。おのおの如意珠となる。バン水精如意珠 ウン瑪瑙如意珠 タラク摩尼如意珠 キリク玖珀如意珠 アク瑠璃如意珠これ遍照身中の五智の功德なり。この如意宝珠変じて法性の大日如来となる。定印に住して金剛宝冠を戴く。冠の中に五智に坐したまう。仏の身色白月の輝(ひかり)の如くして千葉の大白蓮花王に(坐したまう)この蓮花王五股を以て莖とす。これ一塵の中の土なり。又遍法界の身なり。また我が身なり。また一切衆生の身なり。

とする。ここで一つ注目すべき事は、道場観の訓点が誤っているということである。すなわち、「冠の中に五智の仏坐したまう。身色」とすべき所を「冠の中に五智に坐したまう。仏の身色」と訓じるのである。この部分については後ほど少し触れたい。

また、『理趣経』十七段の印明については、虚空蔵に「タラシ」を用いている。

さらに、本尊加持については

智拳印 四所加持 オンアソワカ

大恵刀印 ナウボバギヤバテイハラジャハラミタエイオンキリチシリシユロタビジヤエイソワカ

極喜三昧耶 オンマカソキヤバザラサトバジヤクウムバムコクソラ
タサトバム

を用いる。なお、正念誦の真言は、「オンアソワカ」を用いる。

四 安流との関わり

『一法界ソリヤ法』は、高見が云うように安流から中院流へと相承されたのであろうか。そこで、安流次第との関わりについて考察してみたい。安流は宗意を流祖とする流派で、宥快によって高野山へ相伝された。安流の『聖教』には、『初授』・『牒葉』・『普通折紙』・『秘部折紙』・『最秘部折紙』・『小皮子』等がある。

中院流所伝の『理趣経法』について(佐藤)

そのうち、『初授』『経部』には、『理趣経法』を、『牒葉』『秘法部』には、『理趣経^祥』を伝えている。さらに、『普通折紙』には、「里取糸」(理趣経のこと)一結二十二紙を相伝する。これらは何れも『一法界ソリヤ法』にもとづくものではない。

『一法界ソリヤ法』と関わる『理趣経法』は、『秘部折紙』の中に『ソリヤ法』一紙と、『秘部』の中に『理趣経^{興記}』とがある。『秘部折紙』の中の『ソリヤ法』は真寂の『一法界ソリヤ法』と内容がほぼ一致する。本尊加持については智拳印アを説く。

『理趣経^{興記}』は、本尊加持について

秘密灌頂印

大欲印 オンソラダバザランジャクウンバンコクサンマヤサトバム
大楽印 オンマカソギヤバザラサタヤサラバサトベイビユジャクウ
ンバンコク

極喜三昧耶 オンマカソキヤバザラサトバジヤクウムバムコクソラ
タサトバム

外五古印 バンウンタラクキリクアク

智拳印 ア

又印(二重五古印) オンバザラダトアーク

とする。

安流の所伝と中院流所伝の『一法界ソリヤ法』とを比較すると、道場観は一致するが本尊加持については異なっている

中院流所伝の『理趣経法』について（佐藤）

ことが分かる。

このことを裏付ける資料として、高野山大学図書館三寶院寄託『理趣経法金胎安』がある。⁽⁶⁾

この次第は、表紙裏の付紙に「安流理趣法但し中院に用うべきなり。已達の所用は流例に拘るべからず。宜しきにしたがつて用うべし。初心未練の仁は憫なし。」とある。

この付紙からこの次第が安流のものであること、この安流の次第が中院流においても用いられたことがわかる。ただ、この次第には奥書が無いので正確な書写年代はわからないが内容や装丁から見て密門の次第に先行する事は間違いない。

この次第は、金胎両部について修法がおこなえるように編成されている。まずは「金」の部分について紹介する。道場観は、能説の教主大日を本尊とし説会の曼荼羅を観じ、それにソリヤ法を加味する。具体的に道場観を示すと

虚空の中にア字あり、変じて他化自在天宮となる。一切如来常に所遊の処なり。吉祥称嘆大摩尼殿なり。種種に間錯せり鈴鐸繪幡微風搖撃す。珠鬘瓔珞半満月等もて、莊嚴をす。その中にキリク字あり、大蓮花王となる。上に曼荼羅あり。その上に満月輪あり。上にキリク字あり。千葉の大蓮花王となる。五古を以て莖として、横の五銚の上に立つ。これすなわち一塵の中の土なり。また遍法界の身なり。また我が身なり。また一切衆生の身なり。その蓮花の上にパン字あり如意宝珠となつて五色の光を放つ。光の中にバウンタラクキリクアクの字あり。おのおの如意珠となる。バン水精如意珠。ウ

ン瑪瑙如意珠。タラク摩尼如意珠。キリク玖珀如意珠。アク瑠璃如意珠。これ遍照身中の五智の功德なり。この如意宝珠変じて法性の大日如来となる。定印に住して金剛宝冠を戴く。冠の中に五智の仏坐したまえり。身色白月の輝（ひかり）の如くして千葉の大蓮花王に結跏趺坐し玉へり。金剛手（前の月輪ウン五古）、観自在（後の月輪キリク蓮）、虚空蔵（右の月輪タラン宝）金剛拳（左月輪阿克蓮）、文殊師利（東南月輪アン釵）、纒發心転法輪（西南月輪ウン輪）、虚空庫（西北月輪オン羯）、摧一切魔菩薩（東背輪カク牙）是の如き等の八十俱胝大菩薩衆と恭敬围绕して説法す（般若理趣経を説く）

とする。

本尊加持については

秘密灌頂印

大欲印 オンソラダバザランジャクウンバンコクサンマヤサトバム

大楽印 オンマカソギヤバザラサタヤサラバサトベイビュジャクウ

ンバンコク

極喜三昧耶 オンマカソキヤバザラサトバジヤクウムバムコクソラ

タサトバム

外五古印 バンウンタラクキリクアク

智拳印 ア

又印（二重五古印） オンバザラダトアーク

を用いる。

次に、「胎」について述べる。

道場観は、真寂の『ソリヤ法』にもとづく道場観を用いる。すなわち、

虚空の中にバン字あり。如意宝珠となる。五色の光を放つ。光の中にバウンタラクキリクアクの字あり。おのおの如意珠となる。バン水精如意珠。ウン瑪瑙如意珠。タラク摩尼如意珠。キリク玖珀如意珠。アク瑠璃如意珠。これ遍照身中の五智の功德なり。この如意宝珠變じて法性の大日如来となる。定印に住して金剛宝冠を戴く。冠の中に五智の仏坐したまふ。身色白月の輝（ひかり）の如くして千葉の大白蓮花王に坐し玉ふ。この蓮花王五古を以て莖とす。これ一塵の中の土なり。また遍法界の身なり。また我が身なり。また一切衆生の身なり。

とする。この道場観は中院流の『一法界ソリヤ法』とほぼ同じである。

本尊加持については、先に示した金と同じ本尊加持を用いる。なおこの次第の本尊加持は、金胎共に安流『秘部折紙』にもとづく。

このように検討してみると安流の次第と中院流の次第とは道場観は類似するが、本尊加持については全く異なっていることがわかる。したがって、高見が云うように中院流の次第は安流から流入したものと考えるににくい。

中院流所伝の『理趣経法』について（佐藤）

五 三寶院流との関わり

中院流の『理趣経法』が安流から来たものではないとするところのようにして成立したのであるうか。それを解く鍵は本尊加持にある。すなわち、中院流の『理趣経法』と同じ本尊加持を説くのは三寶院流の『秘鈔』である。

『秘鈔』は、道場観に能説の教主大日を本尊としてソリヤ法を加味したもの（先に示した安流次第「金」の道場観に同じ）を用いる。

本尊加持については

智拳印 四所加持 オンアソワカ
大恵刀印 ナウボバギャバテイハラジャハラミタエイオンキリチシリシユロタビジャエイソワカ
極喜三昧耶 オンマカソキヤバザラサトバジャクウムバムコクソラ
タサトバム
を用いる。⁽⁷⁾

中院流の本尊加持と『秘鈔』のそれとは全く同じである。両者の違いは、『秘鈔』の道場観はソリヤ法にもとづきながらも説会の曼荼羅を観ずるように工夫されているのに対し、中院流の次第では真寂のソリヤ法そのものに戻している点にある。先に述べたが道場観の訓読を誤っているのもこれまで流派の中で用いてきた次第ではなくむしろ本源的なものに返し

中院流所伝の『理趣経法』について（佐藤）

たが故おこったのではないかと考える。

また、十七段の虚空蔵の印明についても『秘鈔』はタラクとするが、中院流の次第ではタランとする。タラクとするのは『理趣経』の説と異なる師伝である。タランとするのは經典にもとづく。このように中院流の次第は三宝院流の『秘鈔』を主要なよりどころとしながらもそれをさらに本源的なものへと改変している。すなわち、道場観については真寂の『一法界ソリヤ法』そのものに戻し、十七段の印明も経説を採用する。これらの部分については三宝院流と違っている。

しかしながら、中院流の次第は三宝院流の『秘鈔』を参照したことはその本尊加持からわかる。さらに、中院流の『五秘密法』が三宝院流にもとづくことを合せ考えれば中院流の『一法界ソリヤ法』は安流から流入したのではなく三宝院流『秘鈔』を参照に作成されたものと考えるのが穏当であろう。妙瑞が性善から三宝院流を相承し（三宝院流洞泉相承）真別所において密門へ伝承したこともこの問題と関連すると考えられる。

- 1 高見寛恭『理趣法の意得』十一頁。
- 2 高見、前掲書、十二頁。
- 3 高見、前掲書、十八頁。
- 4 高見、前掲書、十九頁。
- 5 高野山大学図書館蔵、図書番号（中院／リ真／6）。

- 6 高野山大学図書館蔵、図書番号（484／35／13）。
- 7 大正七八、五一三頁中。

〈参考文献〉

（二次文献）

- 『一法界ソリヤ法中』高野山大学図書館蔵（中院／リ真／6）
『理趣経法金胎安』高野山大学図書館蔵（484／35／13）
『秘鈔』大正七八、二四八九番

（二次文献）

高見寛恭『理趣法の意得』（高野山出版社、一九七三）

〈キーワード〉 中院流、『一法界ソリヤ法』、密門

（高野山大学教授）